

横山ゆずり作 「異性」

効果音 (ドアの開く音)

野口悦子 ただいま。  
(以下オフ。奥の部屋で両親が争っている。)

父 だから、仕事だと言ってるだろう。男は付き合いも仕事のうちだ。

母 あなたは都合が悪くなるとすぐそれなんですから。

父 なんだ、その言い方は？

母 どんなお付き合いだか分かったもんじゃないと言ってるんですよ。何が仕事ですか。わたしが何も知らないと思ってるんですか？

父 うるさい。女が余計な口出しするんじゃない！

母 なんですって?!

悦子(モノローグ) あ～あ、またやってる。このところ、毎日あの調子だわ。

ナレーション 野口悦子の家では、最近、両親の口論が絶えませんでした。一人っ子の悦子にとって、父母の争う姿を見るのは特につらいことでした。

悦子(モノローグ) お父さん、ゆうべも帰ってこなかったんだわ。そんなに忙しいのかしら。

ナレーション 次の日、学校で――。

効果音 (教室のガヤ)

吉本みどり おはよう、悦子。

悦子 あ、おはよう、みどり。リーダーの今日のところ、訳してある？

みどり え、リーダー？ そんなの忘れてたわ。平気よ。あの先生当てないから。それより悦う子、ゆうべの「歌謡ベストテン」見た？

悦子 え、ううん、見ないわ。みどり、実はね、昨日もうちのお父さん…。

関口 (さえぎるように) 見たよ。おれ見た。〇〇のコントがおっかしいのな。順子ちゃんも出てたしよ。

みどり 何よ。あの子なんて、少し顔がかわいいだけじゃない。来週も絶対〇〇が1位よ。あたし、リクエストのはがき出したもん。

関口 ヒマ人だなあ。

石田 野口さん、リーダーの訳なら僕のノート見なよ。

悦子 あ、石田君、ありがとう。

石田 いいよ。でも、みどりさんに何か話があったんじゃないの？

悦子 え？ ええ、あとでもいいの。あの、今、関口君と話してるから。

石田 みどりさんはにぎやかな人だけど、野口さんて、あまり皆と話さないんだね。

悦子 え？ そんなこと…。

ナレーション 石田君に言われたとおり、悦子は、一人っ子のせい、引込み思案な性格でした。小中学校と、ずっと女子校だったため、男女共学の高校に入学して1年たった今も、クラスメートと気軽に話すことができず、また、そんな自分が男の子たちの間で、とっつきにくいと思われることも知っていました。

みどり ねえ、石田君、今、関口君とも話してたんだけど、試験休みに、みんなでどっか遊びに行か

ない？

関口 スケートとかさ。

みどり あら、スケートもいいけど、やっぱり海よ。鎌倉なら近いじゃない？

石田 鎌倉か。いいね。そうだ、野口さん、君も行くだろ？

悦子 わたし？ わたしは…。

みどり 行こうよ。悦子、いつも付き合い悪いわよ。

悦子 そうねえ。でも…。

関口 ダメダメ、いくら誘ったって来やしないよ。野口さんはおれたちなんかと違ってマジメなんだからね。

悦子 わたし… 遠慮するわ。

関口 ほら見ろ。やっぱりフラれた。

悦子(モノローグ) (エコー) どうして、わたしっていつもこうなのかしら。みどりがうらやましい。あんなに自然に楽しく男の子と話せるなんて。わたしにはできないわ。まして、一緒に遊びに行くなんて、とても。中学の時みたいに、女の子だけだったら、どんなに気が楽かしれないのに。ああ、なんで共学なんかに入っちゃったんだろう。

ナレーション 重い気持ちで家に帰った悦子を待っていたのは、意外な母の話でした。

悦子 なんですって?! ウソ、ウソでしょう？ お母さん、お父さんと別れるだなんて。一体どうしたっていうの？

母 お母さんだって、よく考えたわ。でも仕方がないのよ。お父さんたら(次第に興奮して)、お父さんたら、外に女の人つくって、子供まで産ませてたなんて！

悦子 お父さんが…。外に女の日と…。子供まで…。

母 悦子、あなたはお母さんと一緒に来てくれるわね？

悦子 お母さん…。(モノローグ)(エコー)お父さんに、お母さん以外の女の人がいたなんて。お父さんは、お母さんを愛してたはずじゃない。だから結婚したんでしょ。それなのに、ほかの女の人まで。どうしてそんなことができるの？ 不潔よ。不潔だわ！ お父さんなんて、男なんてみんな汚い。最後に泣かされるのは女なんだから。

効果音 (教室のガヤ)

関口 チェ！ ムカついたぜまったく。

みどり なあに、そんな顔して？

関口 野口に試験範囲聞いたらよ、何も言わないで、人を痴漢でも見るような目でにらむんだからな。

みどり 仕方ないわよ。悦子は男の子に免疫がないんだもの。

関口 それにしたって、気取りすぎだぜ。おれ知ってた。おふくろに聞いたんだけどよ、野口んち、ヤバいらしいぜ。

みどり 「ヤバい」って何が？

関口 離婚だよ。なんでも、おやじさんが浮気して子供まで…。

みどり (かぶせて)やめなさいよ！ 聞こえるわよ。

関口 いいよ。大体、そういうやり手の父親がいるくせして、清潔そうな顔してお高く留まってんのが気に入らないんだよな。

石田 やめろよ関口！

関口 なんだよ。本当のことじゃないか。

石田 言っていることと悪いことがあるだろう。謝れよ。野口さんに謝れよ。

関口 お前に言ったわけじゃないだろ。向きになるなよ、石田。

石田 悪いと思ってないのか？

関口 落ち着いたら。お前おかしいぞ、野口のことでそんなに興奮するなんて。そう言えば前から怪しいと思ってたんだ。よく野口に話しかけてたしな。これは気がきかなくて悪かったね。だけど野口さん、いいわねえ、かばってくれる人がいて。(笑い)

悦子 (きっぱりと)迷惑だわ。(皆、驚きのざわめき)わたし、石田君とそんなこと言われるなんて迷惑よ。うちの両親の話、本当のことだもの、かばってくれなくて結構よ。石田君、もうわたしに構わないでちょうだい。

みどり 悦子、本気で言ってるの？

石田 分かった。イヤな思いさせて悪かったよ。(足早に立ち去る)

みどり あ、待ってよ石田君！ ちょっと悦子ってば、いいの？

悦子(モノローグ) わたしったら、なんてこと言ってしまったのかしら。迷惑なんかじゃなかったのに。石田君がかばってくれた時、本当はうれしかったのに。関口君に冷やかされて、わたし、カーツとなっちゃって。謝って済むことじゃないけど、とにかくわたしの気持ちを伝えなきゃ。

ナレーション その夜、悦子は、石田君あての手紙を書いたのです。

石田 (手紙を読む)「昨日は本当にごめんなさい。ひどいことを(悦子の声に)言ってしまっ。いまさら言っても遅いけれど、石田君の言葉、うれしかったんです。でも関口君にあんなふうに言われて、頭に血が上ってしまっ。結局わたし、勇気がなかったんですね。関口君が言った父の浮気の話、本当なんです。もともと男子は苦手だったのに、父のあんなことがあって、人が、特に男の人が信じられなくなっていたんです。裏切られるのが怖かったの。だから石田君の好意を素直に受け取ることができなかったんです。…」

ナレーション それから数日後、校庭で――。

石田 野口さん、手紙ありがとう。

悦子 石田君…。怒ってないの？

石田 怒ってなんかいないさ。手紙を読んで、君の考えてることが少し分かったよ。でも君は、お t 子を全部憎んでるわけなの？

悦子 そうじゃないけど、でも、信じていた父は、母を裏切ったわ。愛し合っていたはずなのに。男の人なんて、そういうこと平気のできるのね。

石田 女の人が裏切る場合だってあるさ。それに、君の話だと、男はみんな悪者で、いないほうがいいみたいだな。だけど、それじゃ生きていけないよ。世界の半分は男なんだから。理解し合わなくちゃ。

悦子 ムリよ、そんなこと。しょせん男と女は違うんだから。第一、わたしなんて男の子とろくに話せないもの。

石田 話してるじゃないか、今、僕と。お互い違うからこそ、分かりあえるってこともあるだろ。いいかい、聖書には、こう書いてあるんだ。ほら――。  
「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」(創世記 1:27)  
「その後、神である主は仰せられた。『人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のため

に、彼にふさわしい助け手を造ろう。』(創世記 2:18)

悦子

石田君、聖書読んでるの？

石田

うん。教会にも行ってる。今読んだようにね、神様は、助け合うために男と女をおつくりになったんだ。争うためじゃない。男女は平等であるべきだけれど、同質じゃないんだ。各々足りないところを補って、高め合っていくのが本当じゃないかな。

ナレーション

悦子は、初めて聞いた聖書の男女観に、驚きさえ覚えました。争う両親や意地悪な男の子たちの姿が一瞬頭をかすめたのです。でも真剣に話す石田君の顔を見ているうちに、何か新しい光のようなものが、心の中に差し込んでくるのを感じました。

悦子(モノローグ)

石田君の言うこと、本当かもしれない…。

ナレーション

彼女は、思わずつぶやいたのです——。

<完>